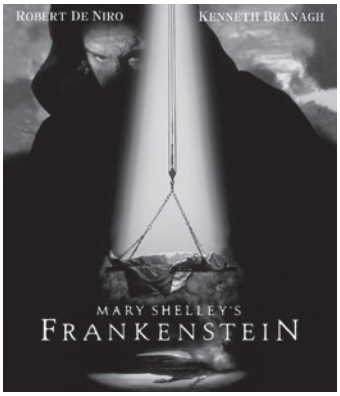
心に残る映画

『フランケンシュタイン』

1994 年 / イギリス / ケネス・ブラナー監督作品

キャラクターイメージ

会員　鈴木 利碩（71 期）



『フランケンシュタイン』
Blu-ray 発売中
Blu-ray：¥4,180（税込）
発売元・販売元：ポニーキャニオン
© 1994 Tristar/JSB Productions,inc. All Rights Reserved.

北野武は『座頭市』（2003）において、勝新太郎が作り上げた絶対的なイメージを、金髪でどこか無機質な異邦人のような風貌で鮮やかに塗り替えた。また、『バットマン　リターンズ』（1992）でダニー・デヴィートがドロドロに怪演した「ペンギン」を、『THE BATMAN』（2022）ではコリン・ファレルが、リアリティ溢れるマフィアへと再定義した。誰もが知る架空のキャラクターが、時代を経て思いもよらないスタイルで再表現される様には、得体の知れない魅力が宿っている。これがリメイクの醍醐味であり、人気漫画のキャラをそのままなぞっただけの実写化では足りない。

2025年、ギレルモ・デル・トロによる『フランケンシュタイン』が公開された。ダーク・ファンタジーの巨匠らしい美しい映像を観て、ふと思い出したのが、1994年のケネス・ブラナー版『フランケンシュタイン』だ。あえてこの旧作を振り返ることで、キャラクターが持つ普遍性を考える。

「フランケンシュタイン」とはあの怪物の名前ではなく、彼を生み出した若き科学者ヴィクターの名前である。あの怪物には名前がない。その姿といえば、青白くて首の両側から太いネジが飛び出し、角張った頭部に短い前髪という姿が一般的だろう。なぜか丸首インナーにジャケットと不釣り合いな格好もセットだ。これは1931年のジェームズ・ホエール版『フランケンシュタイン』が生んだイメージが、アイコンとして強固に定着した結果であろう。本邦では、藤子不二雄Ⓐによる『怪物くん』（1965）の影響も無視できないはずだ。

ところが、本作で「怪物」を演じたのは、役作りのためにタクシー運転手として深夜の街を流し（『タクシー・ドライバー』）、5,000ドル払って前歯を削った（『ケープ・フィアー』）憑依型俳優、ロバート・デ・ニーロである。定着した怪物像を打ち破り、継ぎ接ぎだらけの痛々しい「肉体」を持った生々しい存在を提示した。監督兼主演のケネス・ブラナー（『プラダを着た悪魔2』（2026）にも出るかも？）は、生みの親の「無責任なエゴ」が招く悲劇を重厚に描いている。母を亡くした悲しみから、傲慢にも死体を繋ぎ合わせて命を作った天才科学者が、いざ完成したものの醜さに怯え、捨ててしまう。捨てられた怪物は驚異的な知性で言語を覚え、自らのルーツが死体置き場の寄せ集めだと知って慟哭する。デル・トロ版の方が今の時代らしく映像もテンポも洗練されているが、ブラナー版はゴシック・ホラーの原典を直球に再現し（本作の原題は、『Mary Shelley's Frankenstein』である）、人間の深淵に迫った名作だと言える。

シーザー・ロメロからバリー・コーガンまで変遷し続ける、『バットマン』シリーズのジョーカーのように、この怪物もまた、時代ごとに新しい姿を見せてほしい。

こうしたキャラクターの「再解釈」への興味から、たとえば、昭和から現在まで国民的な人気を誇る青い異形のイメージを剥ぎ取り、物語の骨格のみを借りて、デヴィッド・フィンチャー的な雨の降りしきる暗澹たるクライム・サスペンスへ変貌させたらどうなるか。あの暴力的な支配者や狡猾な御曹司を誰が演じ、背後に立つ「異形」をどのように定義するか、そんな不穏な妄想を今日も続けている。